



(柏崎)

新潟・下沖北遺跡

しもおきた

- 1 所在地 新潟県柏崎市大字下方字下沖
- 2 調査期間 二〇〇二年(平14) 四月～一〇月
- 3 発掘機関 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 4 調査担当者 山本 肇
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 中世(一二世紀～一四世紀)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

下沖北遺跡は、柏崎市街の西を流れる鵜川河口から約2kmほど内陸に入った標高約二・五mの沖積地上に立地する。一般国道八号柏崎バイパスに係る試掘調査に伴って発見され、調査地点は鵜川に接する自然堤防上である。河川改修以前の鵜川は遺跡周辺で蛇行していたため、季節風などによって河口付近の砂丘形成が著しくなっており、河口部が閉ざされたに近い状況

になると、遺跡付近は冠水し、鵜川の自然堤防東側にある氾濫性後背湿地は湖沼化した。このため湿地部分には「鏡ヶ沖」など水に関する地名がみられる。古代の木簡が出土した箕輪遺跡(本誌第二二号)も本遺跡から約1km離れた「鏡ヶ沖」付近に所在する。

中世には鵜川荘が所在し(『吾妻鏡』文治二年六月二日条の「三箇国庄々未進注文」が初見)、本遺跡はその荘域内に含まれる。周辺には中世の遺跡が多く確認され、その大半が鵜川の自然堤防上や丘陵沿いの沖積地などに集中し、珠洲焼や青磁片などを出土する。下沖北遺跡の北側約五〇〇m下流、横山川という小河川との合流付近には琵琶島城(現・柏崎総合高校)が所在する。暦応四年(一二四一)守護上杉憲顕に従って入国した被官・宇佐美氏の居城で、この他に付近には城館が見られない。こちらは柏崎市教育委員会の調査により、一四世紀中頃から一六世紀にかけて存続した可能性が指摘されており、本遺跡はそれに先行するようにも思われるが、この点を明示する資料は見出せず、両者の関係は不明である。

調査の結果、掘立柱建物二九棟、それに伴う井戸二五基、方形竪穴状土坑などを検出した。これらは直交する溝で区画された方形区画内に集中する。ほぼ南北に走る溝は約六〇m、東西溝は約二〇m分を検出し、後者は鵜川の現河道内に延びるため、全容は明らかでない。遺物としては、珠洲焼・青磁などの陶磁器類、漆器碗などの木製品、砥石・鏝・鉄滓・輸入銭などが出土している。カワラケの

ような土師質の土器が圧倒的に多く、一三世紀から一四世紀と一六世紀の二時期のものがみられる。日常具が多いのに対して祭祀具が少なく、箸状木製品が六点と下駄二点が出土している程度である。

木簡は一間×三間の東西棟建物に近接するピットの最下層から出土した。径約三〇cm深さ約一五cmの柱穴で、土器類が共伴しないため年代を明示できないが、径九・五cm、長さ四四cmの柱根と、先端部を尖らせた径四cm、長さ一二・五cmの杭が共伴している。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「く。蘇□□来子孫」

・「く。(墨点五アリ)」

79×24×4 032

上端を円頭状に形作り、左右から切り込みが二段入る。上端から一・三cm下に直径二mmほどの穿孔が認められる。下端は刃物により切断されており、右側面も一部欠損する。調整は表には明瞭に見られるが、裏には見られない。表の墨痕は非常に薄く、赤外線を用いて漸く確認できる。一方、裏の墨痕は報告書作成時にはわからなかったが、今回再見したところ墨点五つを赤外線を確認した。穿孔が墨痕と切り合っていないので前後関係を見定めることは難しいが、墨痕が穿孔を避けるように記され、「孫」も下端に収まるので、元々あった上端部の形状や穿孔を利用して、二次的な転用で記されたと思われる、蘇民将来符としては原形を保っていると判断される。

「蘇」と「来」の文字間が約一文字分ほどしかないが、「子」が判読できるので、蘇民将来の呪符と推測した。裏面には五芒星をかたどった墨点が五つみられる。新潟県内で、これに近い形状の蘇民将来木簡の例としては、笹神村腰廻遺跡の例がある(本誌第三号)。また、穴に糸を通して護符として用いた後に、木釘で壁などに打ち付けた使用例が長岡京跡で報告されている(本誌第三号)。しかしそうした使用法を本木簡で想定した場合、疫病除けの役割を指摘される蘇民将来符の性格と、柱穴の最下層より埋められて出土した地鎮的な状況は符合しがたく、本木簡の性格は不明とせざるを得ない。

9 関係文献

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ下沖北遺跡Ⅰ』(二〇〇三年)

(田中一穂)

